
リリカル アリシア

レフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカル アリシア

【NZコード】

NZ06477Z

【作者名】

レフェル

【あらすじ】

転生者がアリシアに成り代わり、アーチャーと共に未来に飛び。フェイントと共に闘う楽しいハチャメチャ物語である。

転生者はチート? いえ、知りません

クロスする作品はFate/stay nightとFate/Zeroと魔法少女リリカルなのはです!

プロローグ（前書き）

嘘偽り無く本物の人物にしてしまった。

……が、いいか。

のんびりと書いてこいがいい。

プロローグ

研究所前

金髪のロングヘアで縁のリボンで左右に髪結つてる女の子が研究所前で何かを見つめている。

いや、赤い宝石を見つめている。

「？あれ？あそこへ落ちてる宝石は何かな？」

初めまして私はアリシア・テスター^ハロッサ。実は私、転生者なんです！前世の記憶は、あまり覚えてないけど碌な事がなかつたよう気がする。

でも、今は幸せ 優しいお母さんに一緒にいられる今が大切だから。さて、今そんな事よりあの赤い宝石が落ちてる方に行かないと何か面白いことがあるぞうだし

私は宝石の傍に寄ると信じられないと思いました。

だつて英靈エミヤが半透明な状態で這いずつていたから。

一瞬ボーとしてたけびこのままだとまづい気がするんで私は恐る恐る声をかけた。

「あ、あの。ビ、ビ……したの？」

声をかけた半透明な男は私の顔を見て、驚いていた。

そして、返事をしてくれた。

「……セイ…バー……？」

私は彼の言葉を聞いて静かに首を横に振りました。

「ううん。私はアリシアだよ。私の名前は、アリシア・テスター・ロッサ」

これが私とアーチャーとの出会いだった。

* * * * *

アーチャー side

私がいつこの世界にどうやって来たのか分からぬいだが一つ言えることがある。

それは……死にかけていると云ひ事だ。

「……せえ……くつ……あ……」

いや、消えかけていたと言つた方が正しいだろう。

私は這いすりながら考え方をしていく。

ふつ、どうやら世界は私が嫌いなようだ。

突然呼び出されたと思つたらお前なんて呼んでない消えてくれと言つてるようだ。

しかし、私はきっと私をここに呼んだ理由があると確信してこる。ゆえにここに消えるわけにはいかない。

だからこそ私は探した。私を呼び出した理由を……その意味を。

……だが世界は残酷だ。これ……以上存在は……できない……ようだ。

「う……あ……？」

視界が霞み、意識も薄れゆく。

深い……どこまでも深い奈落の底へと落ちていくようだ。

「あ

もう満足に声も出せない。

自分が何かを言つているのか、それすらも分からぬ。

「

これで、終わりなのだろうか。

「

自分がなすべきことすら見つからぬまま消えて行くのだろうか。

込み上げる想いとは裏腹に、意識はどんどん暗黒へと沈んでいく。

ああ。もひ何も見えない。

何も聞こえない。

何も感じ……な、い。

もひ……何……も

そんな中

「あ、あの。どう……したの?」

その声だけは まつきりと聞こえた。

幼い、少し困惑いが混ざった声。

「…………。」

暗闇に光がさす。

その声に意識を引つ張り上げられる。

朦朧とする意識の中、彼がみたのは

「…………セイバー?」

金色の髪が揺れる。

しかし、少女は静かに頭を横に振った。

「ううん 。

それが

「私は
私の名前はね

それが
青年と少女の出会いだった。

プロローグ（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第1話穴は危険だよーー

研究所の託児所

ロングヘアーの金髪で縁のリボンで左右の髪を結ってる少女はふてていた。

「暇〜〜！」

少女の名前はアリシア。

今現在、研究所の託児所にいる。
そして、持ってきた絵本が全部見飽きたらしく、本を豪ごり投げていた。

「あーちゃー、かえつてこないかなー」

む〜とうなりながら私は呟いた。
こんなにも暇になるとは思わなかつたよ
そういうえば、アーチャーとの出会いは驚きの連続だつたなあ。
この世界には魔導師しかいなかつて、アーチャーにはキツイだらうな。

昔を思い出すように私は目を閉じる

* * * アリシアの回想* * *

倒れていたアーチャーに対して私はスグに人を呼びに行こうとしていた。

「まつててーすぐにほかのおとなをよびにこつてくるから

倒れていたアーチャーは、口を開いた。

「いや、必要ない。なぜなら、私は消えるから」

「きえるって、どこの生き物やつの？」

ゆっくりと首を振つてアーチャーが言つと私は不安そうに聞いた。

「この世から、いや……この世界から私という存在が消えてなくなる

私はその言葉を聞いた時、ショックを受けた。

どんな因果かわからないけど、英靈エミヤに会えたのに。

かすかに前世の記憶にある英靈エミヤを救いたい気持ちがある。

そして、今もそれを大切に持つている。

そんな私の様子を察したのか、アーチャーは苦笑していた。

「君は変わつている。赤の他人に、それに私は人間ではない。
それなのに、自分のことのように考えている。

もし、私を助けたいと思っているのなら、君が私のマスターになつ
てくれるのかい？」

そして彼は指で赤い宝石の方を指で示した。

「え？」

私はアーチャーが示した通りに赤い宝石を掴んだ。
そして、宝石に触れた私は気づいた。
なぜなら、赤き輝きを放つ宝石は優しさを感じた。

人のぬくもりを感じた。でも、それがどんどん弱まっていた。

「君がその宝石に魔力で満たすことができるば」

でも、私には魔力がない。

どうすればいいか悩んでいたら、不思議な声が聞こえた。

その宝石からか何かなのかはわからぬけれど。

何か呪文のように聞こえた。

気が付いたら私はその呪文を唱えていた。

“告げる。

汝の身は我の下に、我が命運は汝が剣に、聖杯の寄る辺なくとも
この意、この理に従うのなら”

「我に従え ならばこの命運、汝が剣に預けよ。」

しばしの沈黙の後、宝石が光り出した。

その時、魔力が宝石に満ちたことに気づいた。

この時に私は意識を失いかけた。

「選定の声に応じる、君が私のマスターだつたんだね」

アーチャーは嬉しそうに笑つて言つ。

「ここに、契約は成った。これより我が身は汝アリシアの剣となり
盾とならん。」

君の命に従い、君の為に如何な霸道とて道を切り開く事をここに

誓おう。」

そのアーチャーの話を聞いた私は安心して意識を失った。

それから意識を取り戻した私が見たのは心配していたお母さんとリニスとアーチャーだった。

「それからだつて。私達が一緒に住むようになったのは」

私が回想から戻ってきたときに謎の大爆発が起きた。

それに私は巻き込まれた。

それから何日たつたのかわからないけど、意識を取り戻した時。
母さんがアーチャーがリニスが泣いて喜んだ…いや…訂正しよう。
一部の人人が鼻血をだしていた。

なぜゆえ？

わたしは不思議に思いに頭に手を当てた時、不思議な感じの感触を
覚えた。

その時アーチャーは私の気持ちに気づいたのか苦笑して鏡を渡して
くれたのだ。

「え…ええ――――――?」

わたしは驚きの声をあげた。なぜなら、私の頭の上に狐の耳があつ
たのだから。

呆然としていると母さんとリニスが

「ますます、萌え要素があがつたわ」

「ええ、上がりましたね」

と言つていた。
正直いつて怖い。

うう…頭痛がするよ。

そんな私に苦笑いしてアーチャーが手を差し伸べてくれたので手を握る。

すると、どこか浮遊感を感じた。

不思議は思ひ足元を研讀する

「あ、あなた――――――! ! ?」

思いついた声をあげて叫んでいた。

そして、アーチャーと共に穴へと落ちていった。

「なんだかーーー!?」

と叫んでいたのを覚えてる。
それは私が聞きたいからね？

第1話穴は危険だよーー（後書き）

感想と評価をお待ちしております

人物紹介

| | |
|--------|--|
| (名前) | アリシア・テスタークロッサ |
| (年齢) | 5歳（穴から落ちる前） 9歳（未来に来たら） |
| (容姿) | 金色のロングヘアで左右を緑色のリボンで結つてる。 瞳の色は赤色。 |
| (性格) | 明るく素直で優しい |
| (持ち物) | 赤い宝石のペンダント。 |
| (備考) | フレシア・テスタークロッサの愛娘。 とある転生者がアリシアに成り変わった。 前世の記憶を覚えていない。 英靈エミヤのことを大切に思っている。 リニースとフレシアの鼻血に若干引いてるところがある。 とある研究の爆発事故により、銀色の狐耳と狐の尻尾が生えた。 |
| (デバイス) | |

不明

魔
力)

不
明

* * * *

【クラス】アーチャー

【マスター】アリシア・テスターロッサ

【真名】エミヤ

【性別】男性

【身長・体重】187cm・78kg

【属性】中立・中庸

【筋力】D

【耐久】C

【敏捷】C

【魔
力】

【幸運】

【宝具】?

E B

【クラス別能力】

対魔
力:D

シングルアクション

一工程による魔術行使を無効化する。

魔力避けのアミコレット程度の対魔力。

単独行動:B

マスターからの魔力供給を断つてもしばらくは自立できる能力。
ランクBならば、マスターを失つても一日間現界可能。

【保有スキル】

千里眼：C

視力の良さ。遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。
さらに高いランクでは、透視・未来視さえ可能とする。

魔術：C -

オーソドックスな魔術を習得。
得意なカテゴリは不明。

心眼（真）：B

修行・鍛錬によって培つた洞察力。

窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す“戦闘論理”

逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繕り寄せられる。

【宝具】

『無限の剣製』アンシミティッドフレイドワークス

ランク：E～A++ 種別：？？？ レンジ：？？？ 最大捕捉：

？？？

アーチャーが可能とする固有結界と呼ばれる特殊魔術。

視認した武器を複製する。ただし、複製した武器はランクが1つ下がる。

防具も可能だが、その場合は通常投影の一倍～三倍の魔力を必要とする。

(備考)

何の因果かわからないが、何者かによりミッドチルダに召喚された。しかし、彼の周りに召喚者はいなくてその為に街を彷徨っていた。消えかけていたらアリシアと出会い契約を果たした

人物紹介（後書き）

アリシア「どうもーありしあです！」

アーチャー「アーチャーだ」

そして、作者です

アリシア「あんたさ。他の小説もあるのに手を出しそぎじゃない？」

アーチャー「まつたくだ。愚かにもほどがある」

うぐぐつ…お前等、わたしをいじめて楽しいか！？

二人「うん」「めっちゃ良い笑顔

うわーん！お前等なんか大好きだー！！！

アリシア「どっちなのよ」

アーチャー「どっちだ」

第2話 私とお姫様とヒュード

ヒューー！

ドサツ

「うへん……」
「うへん……」

「うむ……私にもわからない。だが、アリシア。キミはいつ分裂したのかね？」

は？私はアーチャーが何を言つてるのか分からなかつた。
そして私の足元の方からつめき声が聞こえる。

「うぐぐ……だ、誰よ。私の上に乗つてる奴は……」

「あ、貴女達は誰ですか！？お母さんから離れて！」

と、言う声が聞こえたので声が聞こえた方に振り向くと。
……私がいた。

「ええ――――――？」

「ふう……状況は理解できたようだな」

私が叫ぶとアーチャーがやれやれと晒つたように呟いた。

「理解できたのなら、さつわと降りてくれるかしら？」

下の方からとてつもない怒りに満ちた声が聞こえた。

「あ、すいません」

私達は急いで謝つてその人から降りた。

「たつぐ、ジーニのジーニィ。この庭園に忍び込んだバカは……」

下敷きになつた人は立ちあがつて私の顔を見て硬直した。
それと同時に鼻血を吹きだした。

「ふしゃああ――――――！」

「わっふ！？」

私が驚いてから数分後、硬直がとれたのか私に似た少女を見て

「ふえ、フェイト。貴女いつから分裂したの？」

「お母さん、私は分裂しません――！」

少女を見て聞くと少女はきっぱりと否定した。

「ふむ……少し老けたなフレシア」

「（ひぐ）…………その口の悪さは相変わらずね。アーチャー？ いえ、シロウ」

どこか不機嫌そうな女性を見てアーチャーが言つと私は驚いた。

なぜなら、アーチャーの本当の名前はシロウだとこいつは、今知つたのだから。

「ちょ、ちょっと待って…シッ ロ!!をこられるのはそりじゃなによね！？」

てか、なんでお母さんのことあの人は知ってるの…？」

と、少女が叫んでツシ ロ!!をいた。

「アーチャーがいるところとは、もしかして、アリシア？」

「やうだよ、お母さん」

アーチャーを見てやつと気づいたのか私に言つと私は笑顔で頷いた。

「え、それって…私のお姉ちゃん？」

意外な事実を知つた少女は呟いた。

そしてプレシアも困つていた。

「アリシア、お願いがあるんだけど。いいかしら？」

「ん？ なーに？」

お母さんが二口一口と笑顔で言つので私は聞き返した。

「ジユエルシーードを集めて欲しいの。あの子と一緒に… フュイトヒ
ね

そう言つと少女の方に振り向くと最高の笑顔で言つ。

「……へ？あ、はい」

少し呆然としていた少女は遅れて返事をした。
後に聞いたら内心複雑だったそうだ。

「では、頼んだわよ。アーチャー、けして一人に傷をつけないよう
にしてね？」

「傷つけたら私がアンタをコロス」

「りょ、了解した」

お母さんが笑顔でアーチャーに言つとアーチャーは苦笑いして答えた。

こうして私とフェイトのジュエルシード捜しが始まった。

* * * * *

お・ま・け

「ふえ、フェイトが一人に分裂したーーーー？」

と、赤い狼が叫んでいた。

第2話 私とお母さんとフロイト（後編）

アリシア「アリシアです！」

アーチャー「アーチャーだ」

そして作者です！

アリシア「お母さんのキャラ壊れてない？」

アーチャー「壊れるな」

その方が面白いじゃん。

原作を壊してないんだから、良いと思つんだけど。

アリシア「そういう問題じゃない気がするんだけど」

いいじゃん、別に

さて、今回はゲストが来ます！

フロイト「あ、あのフロイトです！」

アリシア「フロイトも連れてこられたの？大丈夫？このゲスになにか」

あ、あれ？アリシアの性格が変なような？

アーチャー「仕方ないだろ。」

第3話 私とアーチャーとフロイトとアルフ

「ここは海鳴市に建つ、とある高層マンションの一室でフロイトの部屋。

私達は今そこにいるわけで。

「えーっと、改めまして。私はアリシア・テスタロッサだよ。貴女のお姉ちゃんになるのかな？」

「う、うひひひひ。初めまして。フロイト・テスタロッサです。」

私が自己紹介するとフロイトも慌てて自己紹介をした。

「緊張しそぎだよ、フロイト。リラックスしないと…」

「で、でも…」

いまだに緊張しているフロイトに私が苦笑いしながら「うひひ」とフロイトが困ったよつて言ひ。

う～ん…どうにか和ますことしができないかな。

「アーチャーも血口紹介しなよ」

「む？… そうだな。私はアーチャーだ。よろしく頼む」

「『』兵？… 変な名前だね。あたしの名前はアルフだよ、フロイトの使い魔さ」

私が隣にいるアーチャーに向つてアーチャーは頷いてから血口紹介

をする。

するとフェイトの隣にいた狼さんが自己紹介をした。

「これで全員自己紹介したね」

「やうだな。…っと忘れていた。これがキミのデバイスだ」

どこか満足気に言えばアーチャーが私にフェイトが持つてると色々違いの物を渡してくれた。

「デバイス? なんで確かに私には魔導師として資質がなかつたはずだよ」

「ああ…確かに君には魔導師としての必要なモノ。君にはないからな。

そのかわりと言えるか分からんが君には魔術回路がある。つまり私と同じ魔術使いにはなる。

それを利用して開発されたのがこのデバイスだ。まさに君専用のデバイスと言つてもいいだろ?」

私が不思議そうに呟つとアーチャーが苦笑いしながら呟つ。

《はじめまして、マスター》

「わー喋つた」

受け取ったペンダントを見ていると声が聞こえたので驚いてつい、声に出していた。

「つーか、アンタ魔導師じゃなかつたんだ」

「うん、私も驚いた」

アルフが驚きながら「う」と「ヒヨイト」も驚いて呟いた。

「ふむ、詳しい話は後にして…とりあえず、アリシア。そのデバイスの名前はバルディッシュ・フォルトだ」

「バルディッシュ・フォルト？」

アーチャーが私を見て「う」と「ヒヨイト」が不思議そうに聞いた。

「ああ、君の持ってるバルディッシュの原型だ」

『その通りです。私の兄に当たります』

「へへ、そうなんだ」

アーチャーがそう説明すると「ヒヨイト」の持ってるバルディッシュが説明してくれた。

それに納得して呟いた。

「じゃあ、早速だが。では、アリシア。そのバルディッシュを使ってセットアップしてくれ」

そう言つとビデオカメラをアーチャーが構えて「う」と

「アーチャー、なんでビデオカメラを構えてるの？」

「ああ…アリシアが変身したら、フレシアにこれで撮るよ「う」と言わ

「それでいたのだよ」

私が不思議そうに聞くとアーチャーが苦笑いしながら答えた。

『では、改めまして。初回は呪文がりますが、次からはセットアップで変身可能です』

「告げる。

汝の身は我の下に、我が命運は汝が剣に、バルディッシュ・ショ・フルト、セーットアップ！」

シユツ

私はそれに頷いて頭に浮かぶ呪文を唱えることにした。
すると光に包まれていた。

光が消えると…私の姿は

「成功だな」

「で、できた…」

アーチャーが満足気に言つと私は驚いて眩いでいた。

私の姿はフェイトのと色違ひの白い衣装の姿になっていた。
マントは黒いけどね。

「じゃあ、変身もできたことだし。そろそろ本題にはこいつか

フェイトは軽く手を叩いてから笑顔で椅子に座った。

「そうだね、そろそろ本題に移ろつか

アルフも同意して椅子に座った。

「そうだね」

私も同意して椅子に座った。

しかし、アーチャーの一言でその場の雰囲気が変わった。

「「うむ…しかし…そもそも。朝食の時間だ、材料はあるのかね?」

「「「は?」「」」

アーチャーの場違いな言葉に思わず私達は何を言つてゐるの?」の赤いの、と思つた。
あ、でも…アーチャーには内緒だよ?

「何を言つてゐる。良い考えをだすには朝食をとつた方がいい」

「でも…材料なんてない。私達、コンビニ弁当で済ましてるから」

アーチャーが呆れたように言つとフュイトが苦笑いしながらすまな
そうに話した。

「コンビニ?」

時間が凍る。

今までに味わつたことのないほどの巨大なプレッシャーが私達を襲
う。

「……それで? フュイトはしっかり食べているのか?」

「そ、それが」

「返答によつては蘇つても。」

穿つ！？

田舎言語では普通 聞かなしょ そんな言葉!!!?

そんな事を考へるのと同時に、アーチャーの右手にいつのまにか赤い槍が現れる。

「ちよつー！ー！ー？」

変な声を上げながらアルフとフェイトが飛び退く。

いや、正直聞きたい事や突き込みたい事は山ほどあるのだけれど、私達の残された野生の生存本能が狂つたまゝにアラートやエマージェンシーを発令する。

(どうすればいいのこの状況!?

正直に言つ? いやでも全然食べてないとか言つたら本気でヤられそうだし、
でも嘘を吐いたからって後でバレでもしたら… ! !)

アルフの恐怖で凍りついた頭では冷静な判断などできるはずもない。焦りと混乱の中 アルフが出した答えは……

「オーディエンスとかは」

「無い。」

まさに絶体絶命。

考えれば考えるほど、思考は泥沼へとまつてこぐ。
終いには涙田になつて、意味不明な言葉を連呼するだけに……

そんなアルフの姿に呆れ果てたのか、アーチャーは一度深く溜息を吐くと

「……正直に答えてくれればいい。お前だつて悩んできたことなんだろう。

魔法も使う事も出来ない俺だが……もしかしたら力になれるかもしない。」

なんといつツンデレ。

いや使い方は間違つてゐるかもしぬが、飴と鞭的な言葉に、
アルフは呆氣なく陥落してしまつたのだった。

「やはり……ほとんど食べていない、か。」

「うん……。初めはちやんと食べてたんだけど。
なんかあつきたりに感じて飽きちゃつたんだ……。」

落ち込むアルフとフロイトの隣で、アーチャーが捨てられた弁当の容器を睨みつけている。

「フン……まあ当然だな。
コンビニ弁当など長期保存のために作られた添加物と防腐剤の塊
にすぎない。」

それを毎日3食も食べていれば飽きなど通り越して嫌悪すら抱くもの。

おまけに出費もバカにならない！

オルタがコンビニ弁当に目覚めてしまったあの日に誓つたのだ
俺は！！

そう　俺はあああああ……！」

偏見と憎しみが混ざつた言葉と共に、よく分からぬ鬪志を燃やし
雄叫びをあげるアーチャー。

私はアーチャーの悲しき過去に涙した。

今になつて気付くことだが、アーチャーの一人称がいつの間にか「
俺」になつている。

まあ自然な感じがする分、そっちが本来の一人称なのかな？。

私としては、フェイトとアルフが初対面の変な緊張なんて持つこと
なく

話せるようなのでありがたかった。

第3話 私とアーチャーとフロイトとアルフ（後書き）

感想と評価をお待ちしております

第4話 私とフュイトーとランサー召喚？

キッチンでアーチャーが料理をしている。

「なんだか、嬉しそうに見えるねえ」

「そうだね」

「いいな～」

それを眺めていたアルフと私はフュイトーは口ぐapeに開いて言ひ。ただ、フュイトーの発言にアルフが硬直した。

「ちよ、フュイトー、アンタにはあたしがいるじゃないか！」

ジャージャーと何かが焼けるような音。時折交ざる金属同士がぶつかる高い音。軽やかでどこか香ばしいその音は、まるで音楽を奏でているかのように、一定のリズムを刻んでいる。

「お姉ちゃん、私もそれが欲しい」

「うええ！？これは無理だよ」

フュイトーが私の胸元にある赤い宝石のペンダントを見て言ひるので私は驚きながら言ひ。

そんなことをしているとアーチャーが朝食を持ってキッチンから出てきてテーブルに並べる。

「私は無理だが、その代わりになりそつなのを拾ってきた」

どうやら私達の会話を聞いていたようだ。

アーチャーはポケットから蒼色のイヤリングを取り出してフェイトに手渡す。

「ありがとう！アーチャー」

「どういたしまして」

フェイトがとても嬉しそうに言つとアーチャーはふつと笑つて答えた。

「うう…あたしがいるのに」

「えつと…どんまいアルフ」

落ち込んでいるアルフを励まして私達は椅子に座り

「「「「いたただきます。」「」「」」

4人一緒に手を合わせて言つ。

テーブルの上にあるのは、炒飯、野菜スープ、冷奴、野菜サラダといつた

比較的手のつけやすいものだ。

予めアルフがフェイトが小食であることを伝えておいたため、量は私やアルフよりフェイトの方が少なめである。

あ、私は大食いじゃないよ？フェイトより、ちょっと多めなだけだからね？

フュイトなどこうと

「…………。」

無言で炒飯にスプーンを伸ばす。
少しすくつた後、ホカホカと湯気がたつソレをじばらく見つめている。

「…………。」

「…………。」

「…………はらはら」

気付けば何故か私たちまで無言になってしまっている。

一掬いの炒飯に注がれる4つの視線。得体のしれない緊張感が部屋に漂っていた。

数秒後、止まっていたフュイトの手が動き始める。

恐る恐る口へと運び、はむつと可愛い擬音とともに炒飯を口にした。

「…………！」

その瞬間4人の身体に力が入る。

すると

「お、美味しい……！」

驚いたように声を弾ませるフヨイト。

その声と共に辺りを包んでいた緊張感が一気に吹っ飛んだ。

ブハアッ、とため込んだ空気が吐き出される。

思えば何でこんなに緊張していたんだろ？

正面にいるアーチャーにいたっては口から魂が出やつなほどの勢いだつた。

その味がとても気に入ったのか、次から次へと炒飯を口に運ぶフヨイト。

途中スープなどにも手を伸ばすと、先ほどと同じように驚き、よりいつそうその表情を明るくする。

「良かつた」

その姿は何とも微笑ましい。

フヨイトの楽しそうな表情に喜びの笑みを浮かべつつ、私も料理を口にする。

「美味しい」

「……」

私はあまりの美味しいに満面の笑みで言ひ。

アルフは思わず言葉を失っていた。本当に美味しいのだな。今までの食事が簡素な弁当だったからだけでなく、純粋にこの料理が美味しいものだというのが分かつてくれたようだ。気付いた時には無我夢中で料理に手を伸ばしているアルフがいた。

その姿を横から見ていたアーチャーは、満足げに笑つて

「アリシアには昔から食べさせていたから大丈夫だとはわかつたが。いや本当に良かつた、フェイトとアルフが気に入ってくれて。

アリシアも満足みたいだしつておいいい！？

アルフそれ俺の……俺のスープ……！」

アーチャーがアルフに向かつて叫ぶ。

ああ、こんな楽しい団欒は昔と同じだ。

あと時はリースが落ち込んでいたり、

お母さんがアーチャーの分まで食べようとしてたことが思い浮かぶよ。

「アーチャー。食器運ぶの手伝つよ」

「わ、私も」

食事を終え、食器を台所へと運ぶアーチャーにフェイトと私はそんな言葉を告げた。

アーチャーは最初、驚いたようだつたが、優しい表情になると

「ああ。お願ひしようかな。」

そう言つて私達の頭を撫でる。

それがくすぐつたくて、でも心地よい。

アーチャーは思い出したかのよに、あつと言葉を上げると、人差し指を立て

「禁止。」

「…………へ？」

突然の一言に私とフェイトは目が点になつた。

「敬語は禁止。フェイトは俺の主人の妹なんだから、家来に敬語を使う必要はないだろ？」「

「で、でも年上の人にはんな……。」

アーチャーは笑みを浮かべて言つけど、フェイトは困惑つてゐる。

「…………その言葉は、アツチで何もせず寝転がつてゐる、アイツにこそ相応しいのだが……。」

視線の先には、食つた食つた／などと言いながらソファの上でダランとしているアルフの姿。

「ま、それにやつぱり敬語つてのは堅苦しいしさ。
これから一緒にやつしていくんだから、そんのは抜きにしたいだろ
？」

「…………わかりました。」

確かにアーチャーの意見は正しいかもしない。
堅苦しいのは私達必要ないもんね。

「禁止。」

「あ……。わ、わかつた……で、いいですか？あつ。」

アーチャーが戸惑いながら言つた敬語になつてしまつた。

「はあ。」

「ありや」

これはしばらく時間がかかりそうだね、ヒヤヒヤヒヤヒヤした感じで笑みをこぼす。

フロイトも照れ隠しのようこ小さく微笑んだ。

すると、アーチャーはキッチンにあつた台拭きを一つ取ると、アルフの方へ力いっぱいに投げつけた。

「こおらアルフー・サボッてないでテーブルくらい拭け！…！」

「ぶふああーー！？」

その後、鼻にクリーンヒットした台拭きを手にアルフがアーチャーへ飛びかかって一騒動。

早朝とは思えないほど騒がしそうだが、その場所から笑いが収まることは無かった。

冬の訪れが漂う海鳴市の早晨。

吐く息は僅かに白く、田の昇り始めた空は瑠璃色の雲に覆われている。

鳥の鳴りも少なくまだ多くの者が眠りに在る中、

そのマンションだけは周囲と異なる様態を表していた。

“告げる。

汝の身は我の下に、我が命運は汝が剣に、聖杯の寄る辺なくともこの意、この理に従うのなり”

「我に従え ならば」の命運、汝が剣に預けよ。」

探索魔法を使うかと思こきや、フロイトは青色のイヤリングを握つてメモを読みながら言ひ。

「え？」

「フロイト？」

「何してるんだい！？？」

私とアーチャーと狼姿のアルフは思わず叫んでいた。

「へへ」

ペロッと舌を出すフロイトが可愛いと思つた私はパソコンなんだろうか。

しばらくの沈黙の後青色のイヤリングが光つた。

光が消えると誰かがいた。

「おーおー、今度は子供かよ。ま、十年後に期待か、じつや

相手は全身を青いタイツのよつたものでつつみ、手には紅い槍を所持している。

その気配は常人ではないと分かる者には分かつただろう。アルフは全身で警戒感を示しているが、アーチャーは何か腕を組んで考えているようだつた。

男はそんなものはどこ吹く風とばかりにフェイトを見つめている。一人男の異常さに気付けないフェイトは、二人の雰囲気にやや戸惑いながらも

眼前の相手を見つめていた。気のせいか男の視線はフェイトを值踏みしているというより、どこか苦笑している。

「そんな警戒すんな、って言つても無駄だわな」

やれやれと両手を挙げて、男はフェイトの前で膝をついた。それに対しフェイト達が揃つて疑問符を浮かべた。何をするのかと、そう思つたのだろう。

すると、それに答えるように男はそのままの姿勢で告げる。

「サー・ヴァントランサー、召喚に応じ参上した。お嬢ちゃんがマスターって事でいいか？」

だが真面目だったのは途中まで。名乗りを終えると再び立ち上がり、フェイトの頭に手を乗せたのだ。

それをなぜか不快に思えない事に、フェイトは驚いていた。

その手は暖かく、自分を安らげるようにな、ぶつきりぱつではあるが優しく撫でている。

そんなランサーの態度に、安堵した私がいた。

(フェイトも無意識に甘えているようだし、安心かな)

私の視線の先では、ランサーに撫でられる事へ違和感を感じない事に、

逆に違和感を覚えているフェイトと、そんな彼女にどこか楽しそうな笑いを浮かべる

ランサーの姿があつた。その微笑まさに私は一人小さく笑みを浮かべる。

本来ならば異常な存在であるランサーへもつと警戒をするべきだろう。

だが、何故かそんな必要はないと思えてしまうのだ。

それだけの安心感をランサーから感じるのが一番の理由。

それだけではなく、フェイトがどこか嬉しそうなのも大きいのだろうが。

「え？　え？　ランサー？　マスター？」

「ああ。ま、主人って意味だ」

「主人？　……えっと、多分違うと」

「フェイトから離れる！」

フェイトの言葉を遮るようにアルフがランサーへ叫びながら噛み付いた。

それにランサーは微かに驚きを見せたが、

それは噛まれた事ではなくアルフが声を発した事に対してだ。

一方、そんなアルフの行動自体に驚いたのはフェイトだ。

ランサーが敵ではないと理解出来たが、そんな彼へアルフが起こした行動は問題しかなかつたからだ。もしここで喧嘩などになつては

不味い。そう考へ、フェイトは何かアルフを止めよつとした。

「あ、アルフ？！ 駄目だよつー ランサーが怪我しちゃつからー。」

そんなフェイトの言葉にも決して放すまいとするアルフ。

そして噛まれているにも関わらず、笑みを浮かべてフェイトを撫で続けているランサー。

そんな中、頑張ってアルフを引き離そうとするフェイト。

その傍から見微笑みながら見てるとアーチャーが私の頭を撫でてくれた。

やはり、ビニが安心してしまう。アーチャーがいてくれるからだろうか？

第4話 私がヒューティングカー召喚?（後編）

感想と評価をお待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0647z/>

リリカル アリシア

2011年12月5日09時52分発行